

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町二丁目2番12号
 電話〇二二一 222—七三七七番
 編集・発行人 笹気直哉

第一回全国会議によせて

事務局 平賀 徹夫



あと13日となりました。京都で「第一回福音教推進全国会議」が開かれるまでの日数のことです。

「開かれた教会づくり」がこの全国会議の課題となっております。これは、教会の今のありかたを見ると大きく分けて二つの問題があげられる、つまり、教会は社会からかけはなれてしまっていた仲間うちだけのと同じもった形になつていっているのではないか、また、個人的に見れば私たち信者の信仰は週に一回それも一時間ほど聖堂でミサにあずかることぐらいですませて、毎日の生活のほとんどを過ごす家庭や職場では信仰というのを気にしないような暮らし方をしているのではないかと、という反省から出てきた課題です。そしてこの二つはきつと深くからみあつていっているものでしょう。福音ということ意識して暮らすとなれば自分に都合のわるいこととか苦しいこととかいっばい起こつてくるからです。

ところで、「全国会議の課題」といえばむずかしく聞こえますが、ピンとくるために、

これは、教会を作つている私たち信者一人ひとりに出された宿題というほうがいいかもしれません。いまの私たちの教会は社会に開かれているとはとても言えない。日本の中で、もつと見近なところでは私たち信者がその中に住んでいる市や町あるいはとなり近所の中で、あるのか無いかわからない、あつてもなくても関係ないや、とでも言われる教会になつてはいませんか、そんな同じもった感じのありかたではなく福音を伝えていく教会でなければ本当じゃないんで、そうなるためにこれからどのようにすればいいか一人ひとり知恵を出してくれませんか、という宿題です。これからというのは、まず、こころ5年ですらばどんなことが考えられるか、何をすべきか、何ができそうかということがあります。さらに、10年後20年後を目指したならば何をどのような段取りで進めていったらよいか、ということもあります。

6月28日号のカトリック新聞に全国の代表者の名前がのつていまして、仙台教区からも

13人の代表者がきまりました。教区代表者の今後の仕事は、教区内すべての信者からの、さきの宿題に対する答え・意見をまとめることです。さしあたって9月12日まで、まとめの中間報告を事務局（東京）に提出することになつていきます。それができるために、各教会とかグループとかで話し合いを進めていただき、意見をどんどん出してもらわないと、というわけです。

各県で大会や集い、連絡会など開かれますから、それに向けて各教会での話し合いが重ねられていることと思いますが、県ごとにまとめるための意見を提出した後でも、どうか話し合いを続け、その内容や意見をぜひ教区事務所なり教区代表者なりに送ってください。よろしくお願いいたします。

【司教様の日程】

7月28日現在

- 8月1～3日 保育施設協議会全国会議(平戸)
- 8日 教区司祭団役員会 (仙台)
- 11日 中央協機構改革特別委員会(東京)
- 20～23日 医歯学生セミナー(猪苗代)
- 30日 青森県信徒大会 (八戸)
- 9月3日 カリタス・ジャパン (東京)
- 5日 常任司教委員会 (東京)
- 7～11日 教区司祭団黙想会 (仙台)
- 15日 福島県信徒の集い (いわき)
- 17日 カリタス・ジャパン (東京)
- 19日 NICグループ作業 (仙台)
- 20日 仙塩地区運動会 (仙台)
- 21日 仙塩地区司祭集会 (仙台)
- 22～23日 社会福祉セミナー(名古屋)
- 23日 教区司牧評議会 (仙台)

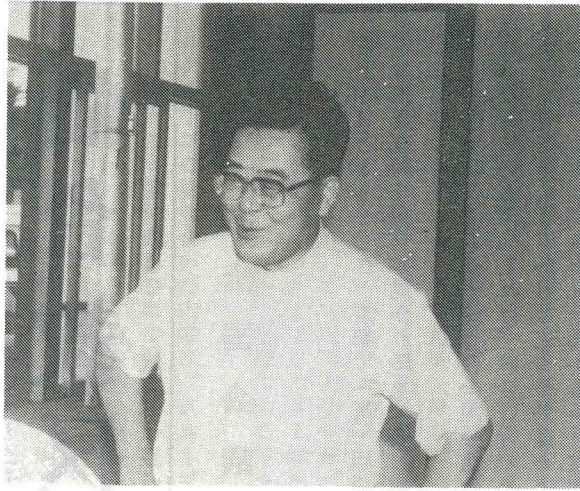


第一回

福音宣教推進全国会議

第一回仙台司教区代表者会議

七月二十五日(土)仙台・元寺小路教会信徒館において、初めての代表者会議が開かれました。出席者は、佐藤司教、梅津司教総代理をはじめ教区からの代表者十一名、司牧評議会から六名、広報担当者一名の計十八名。会議は自己紹介の後、佐藤司教様から今年十一月、京都で開催される第一回福音宣教推進全国会議(以下、全国会議)に向けての経過説明がなされました。



「全国会議開催への発端は、三年前の司教団基本方針が発点になっていきます。こうした全国会議は、日本の教会で初めてのことで、誰もがとまどいましたが、まず、信徒の方々の声を聞くことから始めようということになり、教区ごとに公聴会を開くことになりました。」

しかし、当仙台教区では、一九八六年は、教区創立五十周年にあたり、教区あげての信徒大会に全力を注ぐこととなったため、公聴会等、全国会議に向けての準備はほとんどなされませんでした。

そこで、昨年(一九八六年)九月七日付けで全国会議準備委員を選び、十月二十五日、二十六日の両日、光ヶ丘研修所において最初の集まりを持ち、教区としての十の課題を選定しました。この課題は、司牧評議会の意見を聞いてまとめ、十一月十五日までに中央協議会に提出しました。

全国十六教区の意見は、十二月九日からの臨時司教会議において整理され、ご存知のように「開かれた教会」というテーマに決定されました。

以上のような状況をふまえて、一九八七年元旦の司教書簡で「仙台教区の十項目」をベースに、教区内の皆様に全国会議の内容についてお知らせしました。

仙台教区の第二回準備委員会は、一月二十四日に開き、その内容をさらに充実し、具体化していくために司牧評議会、司祭評議会に提言の形で出しました。なぜならば、全国会

議そのものよりも、そこへいたる『過程』と『その後』が、より大切と思われるからです。すなわち、仙台教区の全体的な司牧方針や具体的提言は、司牧評議会が中心になってやっていかなければならないからです。」

以上のような経過説明の後、司教様は、六月の司教会議で決定された各教区ごとのテーマの分担について話された。

それによると、仙台教区は、柱1の『日本の社会とともに歩む教会』が割り当てられ、教区代表者の中から一名の発題者を出すことになるということ。尚、福岡、大阪、札幌教区も同じテーマです。

最後に、経費についてもふれられ、旅費はプール制で、各教区負担。概算では、ひとり三万円位。他に、宿泊費、食費等があり、仙台教区としては百万円以上はかかる見込みという事です。

~~~~~

児山神父様の近況と白石教会

児山神父様は、六月三十日に八戸労災病院を退院されました。七月三日に来仙され、暁星園に居住しながら東北厚生年金病院でリハビリに励んでおられます。

尚、児山神父様の赴任地である白石教会は四月から七月まで笹気神父が主任代行をしていましたが、八月一日付けで平賀神父が事務局長・司教秘書の仕事を受けながら主任代行として赴任することになりました。

関係者各位の御協力をよろしくお願い致します。

慶長遣欧使節

Str 猪岡 庫

一六一三年十月、月の浦から出帆した慶長支倉使節については、伊達家にも幕府側にも記録が少なく、外国側の資料に多くを俟つものである。不明な点も多いが、次のことだけはつきり言えよう。この使節が目指したこと、それは日本側から言えば太平洋の向う側まで貿易船を派遣しようとしたことであり、宣教師側からは、東北地方にキリシタンの教勢をのばしたいということであった。家康は秀吉のように武力によつてではなく、海外貿易をもつて富国強兵の基礎を固めたいと欲し、そのため太平洋横断の可能な船の建造技術とその航海術、アメリカ大陸までの航路等についての知識を日本人に習得させたいと渴望していた。だからこそ禁教令を出した後であったにもかかわらず、政宗の遣欧使節に積極的な援助を惜しまなかつた。前述したこの船に乗り合わせた不思議な顔ぶれもその間の消息を物語っている。

政宗がローマ教皇、スペイン国王、メキシコ総督等に宛てた書簡の内容は恐らくソテロに任せ、自分は署名捺印をしたのであろう。この書簡の印鑑は本物で今も仙台市博物館に保存されている。使節支倉については伊達家重臣らの名簿に記録されていない。一イエズス会宣教師の記録では支倉は処刑たれた罪人の子だとされていた。イエズス会とフランシ

スコ会の確執の故にこれは中傷にすぎないとされてきたが、つい最近政宗が重臣茂庭石見に宛てた書状が発見され、それによつて常長が遣欧使節に出る十三年前、何らかの罪で父は切腹を申しつけられ、彼もまた追放の処罰を受けていたことが明らかとなつた。ここから推せば政宗は恐らくこの使節は生きて帰れまいと考えて、いわば使い捨ての人選をしたと思われる。

支倉一行は政宗の親書をたずさえて、メキシコ、スペイン、ローマと困難な旅を続けた。政宗の書簡には、キリシタンを大いに歓迎することと貿易をしたいことを述べており、ソテロは政宗は日本皇帝(家康)に次ぐ偉大な方で、次ぎの皇帝になれる人物だと紹介している。一方、この使節の欺瞞とか日本国内のキリシタン迫害についての情報が行く先き先きに届いており、また太平洋航海技術や航路の独占を主張するスペイン人らの妨害にも遭遇した。それにもかかわらず、スペイン国王フィリップ三世、ローマ教皇バウロ五世から手厚く歓迎されたのは、遠い日本からはるばるやつて来たこと、そして何よりもその旅の間に、キリシタンとして洗礼を受けた支倉一行への慈父的愛といたわりの心からであつたと思われる。支倉ら数名の日本人はこの時ローマの市民権を授与されている。

さて、支倉らが出帆した翌年、日本国内のキリシタン弾圧は厳しさを増し、幕府直轄領内だけでなく全国的大追放令が出され、在日宣教師は次々とマニラやマカオへ追われ、キ

リシタンたちには死刑が宣告された。死を覚悟の上で日本国内にとどまつた宣教師たちも勿論、公然と活動はできなくなつた。八年の歳月を経て一六二〇年九月に仙台に戻つた支倉は当然、主君政宗から歓迎されるわけがなかつた。中央よりおくれたが政宗もまた幕府への忠誠のしるしとしてキリシタンを迫害する態度に出ており、支倉は歴史から姿を消してしまつた。帰国の二年後の一六二二年一月に五十二歳で死去したという記録があるだけである。ソテロはマニラに二年ほどとどまつてから、中国人の小舟でひそかに九州に渡つたが、すぐに逮捕され、一六二四年大村で火刑による殉教をとげた。

【お詫びと訂正】

前号、第一〇五号六月一日付けの仙台領内キリシタン史において、タイトルを間違えて掲載致しました。お詫びして、左記のように訂正させていただきます。

誤 日本キリシタン史の経緯  
正 伊達政宗とキリシタン史

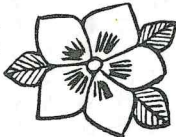
小林司教様の住所が変わりました

700 岡山市下中野七二三の三

教区事務所夏期休暇のお知らせ

八月三日から十五日(土)まで教区事務所は夏期休暇となります。

皆様方の御協力をよろしくお願い致します。



宮城県

信徒大会を終えて

塩釜教会 佐々木正吾

話す、聴く、笑う、そして分ち合う。

五・二名(内子供八一名)の主における兄弟が、今年も仙台白百合学園の体育館に集合した。

教区大会のために去年は開かれなかつた宮城県カトリック信徒大会が、二年ぶりに七月五日に開催された。

今年の信徒大会は、一日の日程全体がミサという形式で企画され、説教にあたる箇所では、亙理・角田両教会主任の佐々木博神父によつて、「私がキリストを伝えるには」という題で講話をされた。

続いて、十人ノ十四人の単位で三十グループに分かれ、昼食をはさんで前後一時間づつ様々な話がなされた。話題は、全国宣教推進会議へ向けての「開かれた教会」についてであった。各グループ共、広い体育館の中に、それぞれの輪を作り、グループリーダーのリードのもとに、次々と話題が展開されて行った。

各グループの話し合いの内容は、グループごとに様々で、信仰の喜びについて、お互いの喜びを分ち合っている所、自分達の信仰を確かなものにするために具体的な方法を考え合っている所、身の周りの友人、知人、困っている人々を、どうしたら主・キリストと出

会わせることが出来るかと、真剣に話し合っている所など、どのグループも、すばらしい分ち合いの場を持てたようです。各グループ共、佐々木師の講話の中で示された「他への批判ではなく、私自身がどうするか」ということを土台にして話を進めて行ったために、他人事の問題ではなく、すべて我が身の問題として話し、聴く事が出来たのではないかと思われました。普段、本音で話すことの少ない中であつて、本音だけの話とびかいました。

その後、「感謝の祭儀」に移り、大勢の神父様方と共に、佐藤司教様司式の共同ミサが続けられ、三時三十分、閉幕致しました。

大会後、様々な人々からの感想をたずねてみますと、一番多かったのは、「今までは、一日中、他人の話を聞くだけの大会が多かつたが、今回は、小グループに分かれたため、自分の意見、考えが述べられて良かった。」とか、「こんなに本音で自分の信仰について話したのは始めてだ。大会に参加して嬉しかった。」という意見が多いようでした。

また反省としては、「もう少し小人数でグループを組めば、一人一人話す時間ももっと取れたし、話しをする人ももっと気楽に話せたのではないか。」とか、「もう少し話題をしぼった方が良かったのではないか。」という声もありました。

とにかく、今大会を通して、各小教区そして各個人が、「開かれた教会」をめざし、又そのため各人の「開かれた心」を基にし、

着実に考え、今まさに足を一步踏み出そうとしていく様子が、まさまさとうかがえる大会でした。

◎ 青森県信徒大会

八月三十日(日)青森県八戸市の白菊学園にて、青森県信徒大会が開催されます。

メイン・テーマは、「開かれた教会づくりを目指して」とし、次の六つのテーマで話し合われます。一、家庭に福音を、二、職場に福音を、三、地域社会に福音を、四、信仰の生涯教育について、五、小教区を超えた宣教の協力体制について、六、教会内の諸活動の見直しについて。

尚、青年部会は前日の夜九時から「青少年が信仰を生きるには」というテーマで先立つて開催されます。

◎ 第十七回カトリックの集い福島県大会

来たる九月十五日(火)福島県小名浜教会にて、第十七回目のカトリックの集いが開催されます。テーマは、「福音宣教のために新しい一步を踏み出そう」(集おう、語ろう、進もう)ということで、県内を四つの地区に分け(県北、県南、会津、浜通り)それぞれの地区で話し合ったものを九月十五日に発表することになっています。

【編集後記】各地区での盛り上がりが見え、感じられます。青年たちも活発に動いているようで益々楽しみ。祈。成功。(笹)

